

加茂湖がもつと愛されるために — 住民による利活用検討と魅力発信

MATCH AD代表 棚村麗乃



冬、夕暮れ時の加茂湖。

団体名	佐渡市地域おこし協力隊 両津班
事業名	離島最大の汽水湖『加茂湖』関連活動団体 認知度向上プロモーション動画制作を題材とした プレイングマネージャー人材育成事業



◎ 豊かさを取り戻した加茂湖

新潟県佐渡島は、北の大佐渡、南の小佐渡と呼ばれる島同士が長い年月を通してつながることで、現在のような特徴的な島の形状がつけられました。島でありながら標高一〇〇〇メートルを超える山々があり、国中平野と呼ばれる平野部では田園風景を望むことができ、住民はこの大地が織りなす自然・食・文化など、多様な地域資源の恩恵を受けながら生活しています。

日本の離島および新潟県内最大の汽水湖である「加茂湖」も、その恩恵の一つです。古くから歌人にも愛された加茂湖は、昭和七年頃から牡蠣の養殖が盛んに行なわれてきました。その後、遊歩道やサイクリングロードが整備され、マリンスポーツを楽しめるようになる

など、現在は観光資源としての一面も持っています。

一時期は生活排水の影響で水質汚染が問題になることもあったそうですが、加茂湖の環境を保全する地域団体の活動により、水質は改善していきました。海の生き物の生育場となるアマモの生育を促したり、濁水をブロックするヨシを生育・活用したりと、地域団体が長年実践してきた活動は、生物多様性の損失を食い止めて反転させ、回復軌道に乗せる「ネイチャーポジティブ」につながる取り組みといえます。

加茂湖の景観を評価し、環境保全活動をしている団体が島内には多数存在する一方で、市民会議やさまざまな調査結果で、「観光地としての楽しみ方が周知されていない」「住民に水質汚染のイメージが依然として残っている」という二つの問題が挙げられていました。本事業では、この二点に着目し、加茂湖の現状や、関連活動団体が取り組んでいる活動を周知することを目的に、動画制作に取り組みました。

◎ 地元住民による地域資源の情報発信

事業では、どれだけ多くの人を巻き込み、自分事として考えてもらうかが肝要です。加茂湖への理解を深めたメンバーを生み出し、次のアクションへつなげてほしい

という思いから、島内外在住の一〇代〜六〇代からなる約三〇名の制作チームを結成しました。加茂湖の利活用に関心のある方、牡蠣漁師になるために佐渡に移住した方、地域資源を活かしたアクティビティの可能性を考える学生など、多種多様なメンバーがそろいました。約半年にわたる撮影では、地域の清掃活動、漁協、水陸アクティビティ、釣り、牡蠣養殖など、多角的な視点で加茂湖を見つめました。

また、撮影と並行して、「加茂湖のキャッチコピーを考えるワークショップ」など、小規模なイベントも複数回実施しました。（一社）佐渡観光交流機構が運営する佐渡島の着地型体験予約サイト「サドベンチャー！」で販売中の「加茂湖のプレジャーボート遊覧」の試乗体験会では、観光資源としての可能性や改善点について多くの意見を出し合い、観光コンテンツをブラッシュアップしていきました。地域に暮らす私たち自身がまず体験し、そのリアルな実体験を観光客に伝えることが大切だと思つたためです。

さらに、地域の飲食店にも加茂湖に目を向けてもらいたいと考え、「加茂湖のクロダイを使つた新メニュー考案会」を開催しました。加茂湖のクロダイは、本来餌としていた生物が環境変化から激減したことで牡蠣の稚貝

を食べるようになり、漁師からすると厄介な存在となっていました。地元でもあまり好んで食べる文化がないことから市場価値が低く、その結果、クロダイの個体数が増加するという課題が生じています。考案会では、上手な捌き方から調理方法、一般の釣り人が飲食店に直接釣ったクロダイを持ち込む方法などについて検討しました。初めてクロダイを調理した飲食事業者は「水質汚染の過去から加茂湖のクロダイは臭いと聞いていたが、そんなことはなく、とても調理しやすい魚だった。印象が大きく変わった」と話し、クロダイの価値向上や利活用への意識の醸成が進みました。

事業推進にあたっては、新たな担い手の育成を意識し、生産者や飲食店、協力者が自ら加茂湖の魅力を発信しようとする意欲を高められるように工夫を重ねました。加茂湖の可能性を広げるためにも、その価値を広く発信し続ける担い手がこれからも増えていくことを期待しています。

◎問題提起からネクストアクションへ

令和八年二月に新潟港で行なわれた「旅する佐渡フェスティバル」(佐渡汽船主催)では、「今までリーチしていなかった層へ、活動参加や興味関心を促す」「加茂湖

を含む佐渡を観光地として楽しむ方法を伝える」という二つを目的に、上映ブースを設置しました。事業の集大成となる全六編のドキュメンタリーの予告編を、約一八〇〇名もの来場者に向けて上映しました。

後日、佐渡市内で行なわれた市民会議内でも上映しましたが、課題に改めて向き合うように指摘する意見や、事業を通して出たアイデアへの大きな反対意見はあがりませんでした。映像は、視覚的に訴えが伝わりやすく、感情を動かす強い訴求力を持つことを改めて感じました。

このドキュメンタリーでは、観光看板の不足、舗装が十分ではないサイクリングロード、加茂湖は汚いという先入観を住民にもたれていることの現状など、加茂湖の



佐渡汽船のイベントに牡蠣漁師とともに出展し、加茂湖をPR。



加茂湖の魅力を1枚で表現したシール。

本事業を通じて生まれた一つ一つのアクションが、加茂湖に広がる波紋のように人と人をつなぎ、新たな挑戦や地域の魅力発信へと発展していることを実感しています。地域づくりは継続が何よりも難しいですが、今後もその波紋を絶やすことなく、継続的な活動を通じて加茂湖の利活用と価値向上に取り組みでいきたいと思います。

ありのままの姿や課題が映し出されており、誰もが「このままでよいのだろうか」と考えさせられる内容になっています。鑑賞した人からは、「駐車場の場所が分からないため、いつも素通りしてしまおう」「クロダイ釣りを楽しめる自然の釣り堀をつくりたい」など、さまざまな声が寄せられており、今後の具体的なアクションにつながる大切な提案も生まれてきています。

離島人材育成基金助成事業事務局より

当事業の成果については、上記 QR コードから動画をご覧ください。佐渡の島内観光においてクローズアップされてこなかった加茂湖を、佐渡観光交流機構や加茂湖漁協、地元事業者の協力のもとドキュメンタリー形式で紹介しており、地域の目を通した加茂湖の利活用を知ることができます。

この活動の優れている点として、動画制作と並行して加茂湖の活用を幅広い関係者と検討したことが挙げられます。ワークショップでは佐渡島加茂湖水系再生研究所のほか、イベント運営に知見がある大学教授、学生を東京から招き、ヨシ舟作りやアマモ再生の活動報告会を実施するとともに、加茂湖のプロモーション方法を模索しています。クロダイの新メニュー開発では、佐渡広域から飲食事業者が参加し、捌き方を学び、各店舗のオリジナルメニューを検討しました。レギュラーメニュー化はまだ困難なものの、一部店舗では提供されるようになったようです。



棚村麗乃（たなむられいの）
一人旅で訪れた両津に惹かれ、二〇二一年に新潟市から佐渡島へ移住。佐渡市地域おこし協力隊を経て、現在は両津港デジタルサイネージ広告「MATCHAD」や両津商店街の飲食店「雲母」を運営。両津地区の祭りやイベントの企画なども手掛ける。

日本離島センターでは広報映像制作を支援する「離島の観光・物産等振興宣伝活動助成事業」も実施しています。人材育成基金より助成金額の上限は低い（映像制作の場合20万円）ですが、通年で募集しているので、ご関心がある方はぜひ一度お問い合わせください。

